

Seven Types of Ambiguity における ‘ambiguity’ の 「多義性」と「二義性」の区別と試み

須永 隆広

はじめに

Seven Types of Ambiguity (1930) はウィリアム・エンプソン (William Empson) が 24 歳の時に執筆したデビュー作であり、‘ambiguity’ をキーワードとした批評理論によって彼は一躍有名になった。その後も、エンプソンは ‘pastoral’ をキーワードとした *Some Versions of Pastoral* (1935)、‘dog’、‘honest’ といった単語に注目し、歴史的・社会的意味を検証した *The Structure of Complex Words* (1951)、キリスト教の神を悪者とみなして執筆した *Milton's God* (1961)、アンドリュー・マーヴェル (Andrew Marvell) など作者の伝記を中心にして執筆した *Using Biography* (1984) など、生涯にわたり批評書を執筆した。このような事実から、エンプソンは一般的には批評家として知られている。しかしながら、彼は *Seven Types of Ambiguity* の執筆前後にジョン・ダン (John Donne) を模倣した難解な詩を執筆している¹。そのためか *Seven Types of Ambiguity* は非常に難解な著書であるが、エンプソンが詩人として ‘ambiguity’ を論じたことが難解である原因のひとつであると考えられる。したがって、本論文では難解な ‘ambiguity’ の意味をいくつかに区別し、ひとつの解釈として、エンプソンが用いた ‘ambiguity’ のどのような意味が最も主要な意味であるかを論考していく。

I. エンプソンの ‘ambiguity’

Seven Types of Ambiguity には『曖昧の七つの型』と題した邦訳があるが、「曖昧」を意味する語は ‘ambiguity’ だけでなく ‘vagueness’ や ‘obscurity’ など、いくつか同義語が存在する。では、なぜエンプソンは ‘ambiguity’ と

いう語を選択したのだろうか。

エンブソンは、‘ambiguity’を用いた理由について、特に、言及していないようだが、彼の師である I.A. リチャーズ (Ivor Armstrong Richards)² や I.A. リチャーズの師である G.E. ムア (George Edward Moore)³ が各々発表した著書の中で ‘ambiguity’ を用いていることから、エンブソンが彼らの影響を受けて ‘ambiguity’ に注目したと推測する。特に、I.A. リチャーズは ‘ambiguity’ について、*Principles of Literary Criticism* の第 21 章、「伝達の理論 (A Theory of Communication)」において以下のように述べている。

In difficult cases the vehicle of communication must inevitably be complex. The effect of a word varies with the other words among which it is placed. What would be highly ambiguous by itself becomes definite in a suitable context. (*Principles of Literary Criticism* 163-64)

このような I.A. リチャーズの見解は、エンブソンが用いる ‘ambiguity’ の定義に直接通じるところがあるのではないだろうか。実際に、エンブソンが *Seven Types of Ambiguity* の中で ‘ambiguity’ の定義について述べている箇所を取り上げ、上記の I.A. リチャーズの見解と比較してみたい。

I propose to use the word[ambiguity] in an extended sense, and shall think relevant to my subject any verbal nuance, however slight, which gives room for alternative reactions to the same piece of language. (*Seven Types of Ambiguity* 1)

上記のように、エンブソンは「ひとつの表現にいくつかの選択可能な反応の余地があれば、どんな僅かなものであっても私はそれを ‘ambiguity’ と呼ぶ」と述べている。このようなエンブソンの見解は、上述した I.A. リチャーズの「一語だけでは極めて曖昧な語であっても適切な文脈において明確な意味を示す」という見解に対して逆の立場から見ていることがわかる。つまり、

エンプソンは、詩に用いられる語を取り上げることで、ひとつの語に複数の意味が存在しうること注目したのである。そして、エンプソンは、*Seven Types of Ambiguity* で取り上げた詩について「美しい詩には ‘ambiguity’ が存在する」と述べ、複数の解釈が可能であると主張した。

II. ‘ambiguity’ の意味と分類

‘ambiguity’ は、通常、あまり良い意味としては用いられないが、エンプソンは詩における ‘ambiguity’ を良い意味に捉えた。そこで、彼が用いた ‘ambiguity’ の意味を理解する前に、通常、用いられる ‘ambiguity’ の意味を把握しておきたい。‘ambiguity’ の語源は、元来、ラテン語に由来しており、‘ambi’ と ‘guity’ に分けることができる。さらに、‘guity’ は ‘gu’ と ‘ity’ に分けられるので、‘ambiguity’ は三つの要素から成り立っている。‘ambi’ は ‘about’ や ‘around’ 「周りを、周囲に」という意味があり、‘gu’ は ‘move’ 「動く」という意味がある。そして、‘ity’ には ‘state’ 「状態」という意味があるので、これらの意味を合わせた ‘ambiguity’ は「周りを動く状態」をイメージさせる。実際、*OED*⁴ や *Webster* (3rd ed.)⁵ も上記の意味を ‘ambiguity’ の定義に含んでいるので ‘ambiguity’ には「二義性」、「多義性」の意味が含まれていると考えられる。では、エンプソンは ‘ambiguity’ を、どのように定義しているのだろうか。以下に、彼が *Seven Types of Ambiguity* の冒頭部分を引用する。

An ambiguity, in ordinary speech, means something very pronounced, and as a rule witty or deceitful. I propose to use the word[ambiguity] in an extended sense, and shall think relevant to my subject any verbal nuance, however slight, which gives room for alternative reactions to the same piece of language.⁶ (*Seven Types of Ambiguity* 1)

上記の引用は繰り返しになるが、エンプソンは *Seven Types of Ambiguity* の中

で ‘ambiguity’ を通常の用い方以上に意味範囲を拡大して用いることを宣言する⁷。

Thus a word may have several distinct meanings; several meanings connected with one another; several meanings which need one another to complete their meaning; or several meanings which unite together so that the word means one relation or one process. This is a scale which might be followed continuously. ‘Ambiguity’ itself can mean an indecision as to what you mean, an intention to mean several things, a probability that one or other or both of two things has been meant, and the fact that a statement has several meanings. (5-6)

このように、エンプソンが *Seven Types of Ambiguity* の中で定義する ‘ambiguity’ は、ある作品の文脈からひとつの語、あるいは、ひとつの文法構造が二重の意味またはそれ以上の意味を内包している場合（つまり、「二義性」から「多義性」に至る場合）を含めた広い定義で用いていることが分かる。

Ⅲ. 「多義性」としての解釈

エンプソンは、*Seven Types of Ambiguity* で取り上げた詩を語や構文など、さまざまな視点から多義的に解釈を試みた。このような多義的なイメージは、初期の著書のタイトルからも想像しやすい。たとえば、本論文で取り上げている *Seven Types of Ambiguity* は、文字通り「七つの型」⁸ であるし、第二の著書である *Some Versions of Pastoral* も「牧歌の諸変奏」と訳されているように多義的な解釈を示唆するタイトルになっているからである。つまり、「多義性」は、*Seven Types of Ambiguity* だけの特徴ではなく、エンプソンの特に前期の批評理念⁹ を象徴しているといえる¹⁰。

エンプソンの ‘ambiguity’ を「多義性」と解釈できる箇所は、彼が *Seven Types of Ambiguity* に取り上げた詩の解釈に多く見出すことができる。以下

に、*Seven Types of Ambiguity* の最初の例として掲載されているシェイクスピア (William Shakespeare) の『ソネット』(*The Sonnets*) 73 番¹¹ を取り上げるが、第一の型¹² が最も単純な ‘ambiguity’ であると述べており、第一の型は「語あるいは構文が同時に数個の働き方で効果を持つ場合」と要約できるので、エンプソンが取り上げる語、あるいは、構文などに複数の意味が存在すると解釈する。なお、ここでのエンプソンの分析は、詩の一行に見出せる比喩に焦点を当てた多義的な解釈である。

Bare ruined choirs, where late the sweet birds sang,

(*Seven Types of Ambiguity* 2)

エンプソンは、上記の詩を引用して、地口や二重構文もなく感情の不明確さもないと述べている。しかしながら、多くの比喩が当てはまるとして、以下のような解釈をする。

...because ruined monastery choirs are places in which to sing, because they involve sitting in a row, because they are made of wood, are carved into knots and so forth, because they used to be surrounded by a sheltering building crystallised out of the likeness of a forest, and coloured with stained glass and painting like flowers and leaves, because they are now abandoned by all but the grey walls coloured like the skies of winter, because the cold and Narcissistic charm suggested by choir-boys suits well with Shakespeare's feeling for the object of the Sonnets, and for various sociological and historical reasons (the protestant destruction of monasteries; fear of puritanism), which it would be hard now to trace out in their proportions; there is a sort of ambiguity in not knowing which of them to hold most clearly in mind. (2-3)

エンプソンの「荒廃した聖歌隊席は歌う場所であり、聖歌隊席は一行に座る

という動作を伴う」、「かつては、聖歌隊席が森に似た建物に周りを囲まれており、花や草のようなステンドグラスや絵画で彩色づけられていた」と言う解説は、荒廃する前の聖歌隊席をイメージした解釈である。さらに、エンプソンは、「聖歌隊席は冬空のような色をした灰色の壁以外の全てから見放された」や「聖歌隊によって示唆された冷たい自己陶酔的な魅力は、ソネットの対象（青年貴族）とさまざまな社会的・歴史的理（プロテスタントによる修道院破壊、ピューリタン恐怖）に関するシェイクスピアの感情に当てはまる」とも述べ、荒廃した修道院の状況がシェイクスピアの青年貴族に対する感情に一致すると解釈した¹³。このように、エンプソンは彼自身が見出した多くの比喩のどの理由を最も意識すべきか判らない点に、‘ambiguity’が存在していると主張し¹⁴、多義的な解釈の仕方を示しつつ、最終的な判断を読者に委ねている。

IV. 「二義性」としての解釈

エンプソンが用いた「二義性」という意味の ‘ambiguity’ は、ふたつの意味が並置している場合と、ふたつの意味が対立している場合の二種類に区別できる。まず、ふたつの意味が並置している場合の具体例は、第三の型に分類されているジョン・ドライデン (John Dryden) の「アミントスの死」(*Death of Amyntas*) に取り上げられている。以下の引用では、エンプソンは語における ‘ambiguity’ について地口を取り上げ、一見結びついているとは思わないふたつの意味がひとつの語に結び付けられている例を取り上げる¹⁵。

but soon he found
The Welkin pitched with sullen Clouds around,
An Eastern Wind, and Dew upon the ground. (106)

上記の詩において、エンプソンは ‘pitched’ を地口として次のように解釈する。

… *pitched* means both ‘blackened as with pitch by the thunderclouds’ and ‘pitched like a tent,’ so that the *Welkin* seems at once muffled and to have come lower; perhaps even the two meanings act upon one another, and the material of the tent has been tarred and blackened in a forlorn attempt to keep out the rain. (106)

上記のように、エンブソンは、地口である ‘pitched’ に「テントを張る」と「ピッチ（コールタールやタールなどを蒸留したときに残る、黒く、よく固まる粘性物質）のような雷雲によって空が黒く塗られる」というふたつの意味が含まれていると述べている。したがって、上記の解釈のどちらも「空が何かに覆われてドームのようなイメージ」を持たせるので、‘pitched’ に含まれるふたつの意味は、程度の差こそあれ並置されている。

他方、ふたつの意味が対立している場合について、対立的な意味の「二義性」であると考えられるのは、*Seven Types of Ambiguity* の第七の型に取り上げられている ‘ambiguity’ である。第七の型を要約すると、「その語が持つふたつの意味が対立しており、その結果全体の効果が作者の心の中の根本的な分裂を示している場合」であるが¹⁶、さらに、エンブソンは以下のような場合も第七の型に含むことができると述べている。

… in part because of the vagueness of the definition, one may regard even quite casual expressions of relief, or the throwing off of anxiety, or what not, as of the seventh type. (200)

つまり、エンブソンは第七の型の定義が茫漠としているため、全くさりげない安堵の表現や、不安の放棄など、これらに類似するものを第七の型とみなす事ができるとし、シェイクスピアの『マクベス』(*Macbeth*)、第一幕第三場（マクベスがコーダー領主の地位と魔女達の予言に直面した場面）の分析に取り掛かる。以下に、その箇所を引用する。

Come what come may,
Time, and the Houre, runs through the roughest Day, (201)

上記の引用について、エンプソンは、ふたつの解釈が可能であると述べている。まず、一つ目の解釈を以下に引用する。

‘Opportunity for crime, or the accomplished fact of crime, the crisis of action or of decision, will arrive whatever happens; however much, swamped in the horrors of the imagination, one feels as if one could never make up one’s mind. I need not, therefore, worry about this at the moment’
(201)

上記における一つ目の解釈では、エンプソンは、「暗殺の機会、あるいは暗殺の成し遂げられる事実、そして、実行あるいは決断の危機は、何が起ころうともやってくるだろう。だから、どんなに想像の恐怖に圧倒されようとも（その想像がまるで決心させないように思っても）、それを気にかける必要はないのだ」と述べ、マクベスは何か起こることを期待しているという意味を含ませている。

他方、上記とは対立的な意味を含む解釈を以下に引用する。

‘This condition of horror has only lasted a few minutes ; the clock has gone on ticking all this time ; I have not yet killed him ; there is nothing, therefore, for me to worry about yet.’ (201)

上記の解釈では、エンプソンは、「この恐怖の状態はほんの数分間のことだったが、その間も時計はずっと時を刻んでいた。私はまだ彼を殺したわけではない。だから、私は何も心配することはないのだ」と述べている。この解釈は前者とは反対にマクベスは何か起こることを期待していないという意味が含まれている。したがって、エンプソンが上記の『マクベス』の二行から対

立的な意味の「二義性」としてふたつの解釈を行ったと考える。また、このような、エンプソンの対立的な「二義性」は彼の批評理念そのものにも表れている。たとえば、彼は‘ambiguity’を七つに分類しているが、大別すれば「意識」と「無意識」に区別することができる。ここでいう「意識」とは詩の作者が意図していることを指しており、「無意識」とは作者が意識していないにもかかわらず、読者が読み取ることを指している。言い換えれば、作者が意図したものと読者によって解釈されるものが、ひとつの語や文に含まれているという意味の対立である。対立的な意味として *Seven Types of Ambiguity* の型を区別すれば、第三の型および第六の型は第四の型および第七の型と対立的な関係であると解釈できる。なぜなら、エンプソンは、第三の型と第六の型の特徴を表面的、かつ意識的であるとして同種類のものと見做しているが、他方で、第四型と第七の型は深層的、かつ無意識的であるとして同種類のものと見做しているからである¹⁷。したがって、*Seven Types of Ambiguity* には構造的にも対立的な意味の‘ambiguity’が見出せることから、筆者は、「二義性」をより細分化すれば、並列的な（非対立的な）要素を含む「二義性」と対立的な要素を含む「二義性」、つまり「両義性」¹⁸に区別することが可能であると考え。この「両義性」という意味で用いた‘ambiguity’は、対立的な要素が含まれているので、当然、相反するふたつの解釈が衝突を起こす。具体的には、通常なされてきた詩の解釈とエンプソンの解釈が対立し、最終的に、各々読者がどちらかを第一の解釈として選択するとき、その対立が解消する¹⁹。

以上から、「多義性」の意味で用いた‘ambiguity’には、エンプソンが解釈に複数の意味をもたせることで読者に解釈の選択を委ねるとしたが、多義的な解釈は、詩人ならではのエンプソンの想像力に依存するところが多く、結局は「二義性」の意味で用いた‘ambiguity’から派生したものであると解釈する。言い換えれば、「多義性」は「二義性」に収斂することができる。また、筆者は、通常解釈と対立する解釈が存在する場合に、「両義性」という意味で用いた‘ambiguity’が存在すると述べたが、エンプソンが、当時、執筆していた詩の中にも対立的な要素が見出せることから、エンプソ

ンが *Seven Types of Ambiguity* で主要な意味として考えていた ‘ambiguity’ とは、対立的な意味が含蓄されている詩を掘り起こして、これまでの詩の解釈に新しい解釈を加え、詩が持つ言葉の豊かさを読者に伝える両義的な ‘ambiguity’ だったのではないだろうか。

おわりに

本論文では、エンプソンが用いた ‘ambiguity’ は G.E. ムアや I.A. リチャーズの著書によってヒントを得たものであり、かつ発展させたものであると論考した。ここでいう発展とは、エンプソンが用いた ‘ambiguity’ は複数の意味に解釈できるということであり、筆者は、彼の ‘ambiguity’ を「多義性」と「二義性」に区別することを試みた。「多義性」については、エンプソンの著書のタイトルからも想像できるが、多義的な解釈という点から、実際に、エンプソンが *Seven Types of Ambiguity* に引用した詩を例として、複数の解釈が可能であることを取り上げ、最終的には、読者に解釈の判断が委ねられていると述べた。また、「二義性」については、*Seven Types of Ambiguity* に引用した詩が、さらに細分化できるとして、解釈上、非対立的な要素を含む「二義性」と対立的な要素を含む「二義性」に区別できると論じた。とりわけ、後者の「二義性」を「両義性」と言い換え、通常の詩の解釈とエンプソンの解釈が対立することで、最終的には、読者がどちらかの解釈を選択することにより、解釈における対立が解消されるという見解を示した。したがって、エンプソンが「両義性」の意味で用いた ‘ambiguity’ に焦点を当てることで、実際には ‘ambiguity’ が解消されることを指摘できたと考える。

註

- 1 エンプソンが執筆した詩のうち 6 篇が『ケンブリッジ詩篇 1929』に掲載され、F・R リーヴィス (Frank Raymond Leavis) から高い評価を得てい

た。岩崎宗治『こころの表面張力』 p.6

- 2 岩崎宗治氏は、「I.A. リチャーズが G.E. ムアから学んだものは、言葉の論理的用法と詩的用法の区別、および言葉の持つ多義性の問題であった。」とエンプソンが I.A. リチャーズと結びつく興味深いことを述べている。

岩崎宗治『現代イギリス詩学』 p.3

- 3 岩崎宗治氏は、上記の著書の中で、G.E. ムアと I.A. リチャーズとの師弟関係を「I.A. リチャーズは、ケンブリッジでモラルサイエンス（精神科学）を勉強した人である。I.A. リチャーズが学生であった 1915 年頃、この大学で最大の影響力を持っていた哲学者は G.E. ムアで、G.E. ムアはヴァージニア・ウルフの家に会した文学者や芸術家の集まりである、ブルームベリー・グループに思想的基盤を与えた哲学者である。」と述べている。

岩崎宗治『現代イギリス詩学』 p.3

- 4 OED では ‘ambiguity’ の定義を以下のように掲載している。

1, a.Objectively: Capability of being understood in two or more ways; double or dubious signification, ambiguousness.

b. in Literary Criticism

2, A word or phrase susceptible of more than one meaning; an equivocal expression.

- 5 Webster (3rd ed.) では以下のように、エンプソンによって用いられた ‘ambiguity’ を掲載している。

4: an ambiguous word or expression (a poetical (ambiguity) depends on the reader's weighting the possible meanings according to their probability — William Empson)

- 6 エンプソンは「‘ambiguity’ という語をあまり拡大解釈すると、ほとんどその意味が無くなってしまう」との理由から、初版の ‘ambiguity’ の定義「何かの言葉の続き具合の結果として、たとえ、ごく軽いものにしても散文の直載な叙述に何らかのニュアンスが加わる場合、これを ‘ambiguity’ と呼ぶことにしたい。」を、再版では「どんなに僅かなニュアンスでも、それが同じひとつの表現に別の反応の余地を与えるならば、

それは私のテーマに関係があると考えたつもりである。」に変更した。筆者は、他の批評家からの批判や、エンブソンが初版の定義では読者が混乱してしまうと考えて、再版では‘ambiguity’の定義を狭めたのだと考えている。さらに、再版では各章の冒頭に要約をつけているが、これも、読者の混乱を避けるための処置ではないだろうか。なお、本論文では、エンブソンの‘ambiguity’の定義は再版以降の新しい定義を取り上げている。

- 7 岩崎宗治氏は、エンブソンが用いる‘ambiguity’について、「エンブソンの『曖昧』はむしろ、批評用語としての『曖昧』であって、これを日常語の『曖昧』と混同してはならない。」と述べている。岩崎宗治『現代イギリス詩学』p.17
- 8 *Seven Types of Ambiguity* はタイトルの七とは裏腹に八つの章（結語である最終章を除けば七章）で構成されている。エンブソンに関する論文には、しばしば彼が用いた七という数字にどのような意味が含まれているのかが取り上げられたようだが、実際には、エンブソンのラッキーナンバーというだけで、特に意味はないようである。ただ、筆者の意見では、*Seven Types of Ambiguity* はデビュー作でもあるので数字を用いることで読者の注意を引こうとしたと同時に、数学者であった彼の数字へのこだわりがあったのではないだろうか。ちなみに、5年後に出版された *Some Versions of Pastoral* も *Seven Types of Ambiguity* と同様に七章だてであるが、こちらは数字ではなく some を用いて曖昧にしている。したがって、書名の‘some’はエンブソンが名実ともに文学者になったことを象徴していると考ええる。
- 9 筆者は、エンブソンの著書が前期と後期に二分できると考える。前期の著書は、*Seven Types of Ambiguity*, *Some Versions of Pastoral* および *The Structure of Complex Words* にみられる分析批評を中心とした著書であるが、後期の著書、たとえば *Using Biography* では作者の伝記を用いているように、ニュー・クリティシズムとは明確に異なる批評となっている。
- 10 今日では *Seven Types of Ambiguity* は、翻訳の『曖昧の七つの型』に倣って「曖

味」と訳されているが、以前は「多義性の七つの型」のように ‘ambiguity’ を「多義性」と訳した論文もある。この発見は、筆者にとって「七つの型」を「多義性」と見做す契機になった。なお、エンプソンは *Some Versions of Pastoral* や *The Structure of Complex Words* においても、作品や語を多義的に解釈しているので、*Seven Types of Ambiguity* と共通している。

- 11 エンプソン批評といえば、第一に思い浮かぶのが数多くのシェイクスピアの作品に対する分析である。エンプソンの著書にシェイクスピアに関する分析が多いのは、ひとつには、単にシェイクスピアの注釈が他の作家よりも多く、そこから考えられる解釈を可能な限り掲載したことが理由に挙げられると思われる。さらに、エンプソンは美しい詩には ‘ambiguity’ が存在すると述べているように、シェイクスピアが優れた作家なので、彼の作品はエンプソンにとって ‘ambiguity’ の宝庫なのだろう。しかし、エンプソンは、シェイクスピアの作品が ‘ambiguity’ の宝庫というだけでなく、シェイクスピアの複数の作品を知っていれば、他のひとつの作品のある箇所に ‘ambiguity’ が存在することを数多くの他の作品から見出せると考えているからである。なお、エンプソンは *Seven Types of Ambiguity* の中で次のように述べる。“…how one is helped by the rest of his work to put a great deal into any part of it,…” (*Seven Types of Ambiguity* 18) このようなエンプソンの考えにもとづき、筆者は、エンプソンがシェイクスピアの作品から数多くの ‘ambiguity’ を拾い出していると考ええる。

- 12 第一の型におけるエンプソンの要約を以下に引用する。

CHAPTER I: The sorts of meaning to be considered; the problems of Pure Sound and of Atmosphere. First-type ambiguities arise when a detail is effective in several ways at once, e.g. by comparisons with several points of likeness, antitheses with several points of difference, ‘comparative’ adjectives, subdued metaphors, and extra meanings suggested by rhythm. Annex on Dramatic Irony. (*Seven Types of Ambiguity* v)

- 13 ハッフエンデンは F.W. ベイトソン (Frederick Wilse Bateson) の批評を次

のように紹介している。

...it was ‘fundamentally non-historical’ – in order to tax Empson for manifesting a ‘defective contextual sense’ when he invented the by now almost notorious list of reasons, ten in all’ for linking Shakespeare’s boughs with ruined monasteries. ‘The real critical error is more fundamental,’ Bateson claimed. ‘It is simply that the line on which Empson expatiates is not a separate sentence or even a separate subordinate clause. It is a verbal fragment that is, strictly speaking, *unintelligible* when lifted like this out of its syntactic context.’ (Haffenden 281)

- 14 岩崎宗治氏は「言葉が持ついくつかの効果のどれが最もはっきりとはたっているのかわからない点に曖昧がある。エンプソンも言うように、曖昧の第一の型をこのように定義すると、重要だと考えられる全ての文学的な問題がここに含まれてくる。」(岩崎『現代イギリス詩学』p.12)と述べている。したがって、筆者は、第一の型は最も単純でありながら、非常に重要な‘ambiguity’であると考ええる。

- 15 もっとも、エンプソンによれば、第三の型で重要なのはふたつの意味がひとつの語に結び付けられ、そこから付加的に効果を生み出す場合とされているので、付加的な効果を生み出す前提の語が地口として取り上げられている部分に注目して「二義性」を考えている。

- 16 第七の型におけるエンプソンの要約を以下に引用する。

CHAPTER VII :The seventh type is that of full contradiction, marking a division in the author’s mind. Freud invoked. Examples of minor confusions in negation and opposition.... (Seven Types of Ambiguity vi)

- 17 岩崎宗治氏は、「『曖昧の七つの型』を生み出した思想風土が、フロイト的なものであったということは、エンプソン自身が述べていることである」(岩崎『現代イギリス詩学』p.16)として、「『曖昧』におけるフロイディズムは、とりわけ第四の型と第七の型に顕著に表れている。」と述べている。岩崎宗治「『曖昧の七つの型』とケンブリッジ」、『英語青年』1984年9月号130巻6号

- 18 池上嘉彦氏は、「両義性とはもともと対立するはずの—したがって、一方

が存在すれば他方は存在するはずのない—ふたつの特徴が共存するという状況である。」(池上『記号論への招待』p.237)と定義しているが、本論文では、並列的な(非対立的な)要素を含む「二義性」と、対立的な要素を含む「二義性」を明確に区別するために、後者の要素を含む「二義性」を「両義性」と呼ぶことにする。

- 19 通常エンプソンの解釈は「対立の解消」ができないとされている。しかしながら、エンプソンは *The Structure of Complex Words* の中で、“Chief” meaning (主要意味) という言葉を用いて、普通、あるひとつの意味を「自分が真に意味したもの」として拾い出して示すのが常であると述べている。したがって、本論文では、エンプソンの ambiguity には対立の解消を念頭に置いている概念も存在すると解釈している。

Works Cited

- Empson, William. *Seven Types of Ambiguity* (1930), New York, New Directions;1966; 岩崎宗治訳『曖昧の七つの型』㊥㊦、東京、岩波文庫、2006 年。
- Haffenden, John. *William Empson: Among the Mandarins*, Vol.1:New York; Oxford University Press, 2005
- Richards, I.A. *Principles of Literary Criticism* (1926), London and New York; Routledge classics, 2001; 岩崎宗治訳『文芸批評の原理』、東京、八潮出版社、1970 年。
- 池上嘉彦『記号論への招待』、東京、岩波新書、2008 年。
- 岩崎宗治『現代イギリス詩学』、東京、英潮社出版、1975 年。
- 岩崎宗治『こころの表面張力』、愛知、中日出版社、2005 年。
- 岩崎宗治『『曖昧の七つの型』とケンブリッジ』『英語青年』1984 年 9 月号 pp.12-13
- 小川和夫『ニュー・クリティシズム—その歴史と本質』、弘文堂、1959 年。

